月日は百代の過客にして（三）

西をさむ

ブーメラン返らず蝶となりにけり　　小林凜

ブーメランは、オーストラリア先住民の狩猟用の飛び道具ですが、投げると必ず元の所に戻って来ます。如何した事か凜さんの投げたブーメランは返って来なくて蝶になったと言っているのです。何と可憐な発想でしょう。でもこの句が創られたのは多分、二〇一一年の六月頃だと思われます。そうです、あの東日本大震災から三月程経った時に詠まれたのです。その年の六月三十日の新聞の片隅には、被災者数（死亡　一五五〇八人、行方不明　七二〇七人）と有ります。この句は、被災者への哀悼の意と無念を籠めた追悼詩に違いありません。実はこれは、同年の七月十二日の朝日俳壇に掲載された一句です。この時、作者の凜さんは僅か十才でした。この清らかな心に強く胸を打たれた人は大勢いた事でしょう。今では新聞に被災者数すら載っていません。国民の九十％以上が、そう言えばそんな事が有ったなあぐらいにしか思っていません。未だ三年も経っていないのにこの有様です。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」と言いますが「喉元過ぎれば窒息死する」と為らぬ様に皆さん、くれぐれも御用心を。

さて、皆さんも新しい年を迎えられた事と思いますが、初詣で車を運転される時はどうかセンターラインを越えない様に十分気を付けてください。ところで、センターラインからセンターを取ったラインと言う言葉を御存知でしょうか。私は、運動会に引く白線の事とばかり思って居りましたが、どうも違う様です。これを使うと、時間を掛けずに回覧板を何処にでも回す事が簡単に出来るそうです。又、必殺仕事人に仕事を頼む時にも使えるそうで、藤田まことさんも、あの世でびっくりです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

しかし、蜘蛛の網に掛かった昆虫の様に、縦横に張り巡らされたこのラインに人間と言う動物が引っ掛かってしまった様です。確かに便利です。ペンも紙も要りません。でも何かが漏れて居ませんか。私達の周りに在り見えない物です。そう、時間です。時は全てに平等で、淀みなく流れています。考えて見て下さい。春夏秋冬と廻って来て初めて一年が経つのです。時の流れを見失わないでください。時間を捨てると言う事は、人生を捨てる事と一緒です。

その点、私達には俳句が有ります。是によって記憶を留めておく事が出来ます。しかし、年間に一千万以上の句が詠まれていると思われますが、果して幾つ残るでしょうか。例えば、俳句大会で、二人以上の選者から共選される句はあまり見掛けません。投句数が多く成れば成る程、確立は０に近付きます。思うに、俳句界は現在、迷宮界に嵌っています。では如何にすれば此処から抜け出せるのでしょうか。簡単です。時計の針を巻き戻して、発句の出発点に帰れば解決します。

人生、弥次喜多道中と行きませんか。

十遍の一句よくできおらが春　　をさむ

（完）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。